

この学校にわたしたち

2022. 06. 10 N014

教育という視点で木を観る



私は銀杏並木が大好きで随分前より、いつか神宮外苑の銀杏並木を見にいきたいと思っています。樹齡はわかりませんが小学校の校舎の脇にも大きな銀杏の木があり、秋に黄色く色づくのを楽しみにしています。

普段、私たちは木を見るとき、桜も銀杏も松も…当然のことながらほとんどが幹や枝や葉を見ます。

ただ、教育という点で考えるとそれは全く逆でなければなりません。即ち、枝や葉、

幹も大切ですが、根っこがきちんと育っているかということです。根っこがきちんと張っているからこそ大樹となります。心がしっかりと安定しているからこそ子どもは大きな力を発揮することができるのです。「教育」は将来、子どもたちが大人になった時に幸せに生きるためにあると私は思います。「知識」をつけることは言うまでもないですが、「知識」があるから偉いわけではなく、「知識」があってもその「知識」を悪いことに使う人も多くいます。

そういった意味で、子どもたちの心（根っこ）を育てていけるよう、いろいろな体験を通して考えさせたり、話し合ったりする機会を取り入れていきたいと思っています。ハツ山小学校に子どもたちという40本の並木が色づくことを心に描きながら日々、取り組んでいきたいと思っています。

高学年のあたたかい言葉

毎日の昼休みの恒例のドッジボール。ソフトバレーボール2個を使って20人～30人くらい、職員も数名入ってやっています。当てられたり、うまくなげられなかったり、ボールがなかなかまわってこなかったり…。そういうゲームなのですが大人も子どもも興奮しています。そんな中、毎回毎回、ふと「いいよ、いいよ」「大丈夫」「どんまい」など友だちをいたわるやさしい言葉が聞かれます。それが、大人がいるいないではなく、自然と発せられています。ほとんどが高学年の子どもから聞こえます。

登下校においても、ドッジボールにおいても、そして縦割り集会やいろいろな場面で常に高学年としての意識をもって頑張ってくれている成果なのだろうと嬉しく思います。

でも、「ほんとはちょっとしんどいんさ」などたまには思いを出してもいいんですよ。